

Short Fluctuations Questionnaire (SFQ) の信頼性と 同等的妥当性の検討

新潟医療福祉大学医療技術学部言語聴覚学科・市野千恵
新潟リハビリテーション病院言語聴覚科・佐藤卓也
新潟リハビリテーション病院神経内科
新潟医療福祉大学大学院言語聴覚学分野・今村 徹

【背景】

レビー小体型認知症 (Dementia with Lewy bodies: DLB) は、アルツハイマー病 (Alzheimer's disease: AD) に次いで多い老年期の変性性認知症性疾患である。DLB の臨床診断基準 (McKeith et al, 2005) では、認知機能変動が、幻視、パーキンソン症状とともに3主徴の1つと位置づけられている。認知機能変動は、典型的な場合では数時間、数日、あるいは数ヶ月の経過で認知機能が明らかな変動を呈する現象であるが、認知機能変動を操作的に評価する方法は確立されていない。小栗ら (2006) は、DLB 患者の認知機能変動を評価する質問紙である Mayo Fluctuations Questionnaire (MFQ) (Ferman et al, 2004) の日本語版の検討を行ったが、妥当性の示された質問項目は少なかった。

市野ら (2007) は、小栗ら (2006) の検討結果を踏まえ MFQ 日本語版に認知機能が正常に近い場面と低下した場面との差を強調した表現の増補や睡眠に関する項目を追加した計 28 項目の MFQ Japanese revised version (MFQ-JR) を作成した。そして MFQ-JR の各項目を検討し、妥当性が示された 8 項目から、DLB 患者の認知機能変動を評価するための、介護者を対象とした簡便な質問紙である Short Fluctuations Questionnaire (SFQ) を作成した。この研究において、SFQ の内容的妥当性が示された。

永島ら (2009) との共同研究では、SFQ 合計得点の cut-off point を 3 点以下 / 4 点以上と設定し、DLB 群と AD 群の分離、SFQ と独立した行動神経内科医が診断した変動「あり」群と変動「なし」群という各アウトカムにおいて、有意な群間差と約 80% の感受性・特異性を示し、SFQ の構造概念妥当性が示された。

しかし、清水ら (2011) との共同研究において、SFQ はせん妄や前頭葉症候群を呈する患者への適用には難点があり、DLB と AD 患者以外の病態、疾患の患者については、SFQ の構造概念妥当性は不十分であることが確認された。

先行研究より、SFQ は DLB および AD における認知機能変動を検出する構造化インタビューとして妥当性を有することが示された。

本研究では、〈研究 1〉SFQ の信頼性 (検査者間信頼性、検査一再検査信頼性)、〈研究 2〉インタビュー形式とアンケート形式間の同等的妥当性を検証する。

【方法】

〈研究 1〉認知症患者 19 名 (AD 16, DLB 3) を対象に、異なる 2 名の検査者が約 1 ヶ月の期間において SFQ を 2 回施行した。対象患者は、年齢 80.4 ± 6.7 歳、罹病期間 5.8 ± 2.5 年、Mini-Mental State Examination 日本語版 (MMSE) 得点 19.9 ± 4.6 、Alzheimer's Disease Assessment Scale 日本語版 (ADAS) 減点 16.1 ± 7.2 であった。情報提供者の内訳は、配偶者 6 名 (31.6%)、子 12 名 (63.2%)、子の配偶者 1 名 (5.3%) であった。SFQ の施行 1 は、言語聴覚士である検査者 1 が情報提供者となる同居家族に SFQ の質問項目を提示しながら読み上げ、口頭で回答を求めた。施行 2 は、約 1 ヶ月の期間において、言語聴覚士である検査者 2 が同様の方法で施行した。施行 1, 2 の SFQ 合計得点の一致性について、級内相関係数を用いて評価した。

〈研究 2〉認知症患者 19 名 (AD 13, DLB 2, 前頭側頭型認知症 (Frontotemporal dementia: FTD) 2, 特発性正常圧水頭症 (idiopathic normal pressure hydrocephalus: iNPH) 1, 脳血管性認知症 (Vascular dementia: VD) 1) を対象に、アンケート形式とインタビュー形式の SFQ を各 1 回施行した。対象患者は、年齢 81.9 ± 7.0 歳、罹病期間 6.4 ± 3.0 年、MMSE 得点 19.1 ± 5.1 、ADAS 減点 16.9 ± 5.9 であった。SFQ の情報提供者の内訳は、配偶者 9 名 (47.3%)、子 7 名 (36.8%)、子の配偶者 3 名 (16.0%) であった。SFQ の施行 1 は、アンケート形式で行い、情報提供者となる同居家族に SFQ を書面で提示し、自記式で回答を求めた。施行 2 は、インタビュー形式で行い、言語聴覚士である検査者が SFQ の質問項目を提示しながら読み上げ、口頭で回答を求めた。施行 1, 2 の SFQ 合計得点の一致性について、級内相関係数を用いて評価した。

【結果】

〈研究 1〉両施行間の級内相関係数は 0.76 (substantial) であり、SFQ の検査一再検査信頼性と検査者間信頼性が示された。

〈研究 2〉両施行間の級内相関係数は 0.86 (almost perfect) であり、SFQ のアンケート形式とインタビュー形式間に同等的妥当性が示された。

【考察】

本研究より、DLB と AD を対象とする限り、SFQ は十分な信頼性と妥当性を有しており、インタビュー形式とアンケート形式間の同等的妥当性も示された。SFQ を使用することで、操作的に定義した認知機能変動と、個別の認知機能障害や神経精神症状をはじめとする他の要因との関係を検討することや認知機能変動の治療に関する研究へ寄与することも期待できる。すでに予備的な研究も発表されている (飛田ら, 2012)。

また、小関ら (2013) は SFQ 得点が認知機能変動の重症度も評価している可能性を示しており、SFQ によって認知機能変動の重症度に関連する要因を検討できる可能性がある。

【結論】

DLB と AD における認知機能変動の有無や認知機能変動の重症度評価、その関連研究における SFQ の有効性が示された。